



月刊 ZENKEI

AI MAGAZINE

- 2021年2月号 -

- ・最近の時事ネタ
- ・画像分類でSOTA更新
話題のNFNetsの紹介
- ・月刊『ZENKEI AI
MAGAZINE』創刊



12月号

月刊 ZENKEI AI MAGAZINE 2021年2月号

2021年4月7日 初版発行 (オンライン)

2021年4月15日 改訂版発行 (第1刷)

編集：ZAM 編集部

発行所：ZENKEI AI FORUM

連絡先：<https://forum.ai.zenkei.com/>

表紙：furukawa

印刷所：ちょ古っ都製本工房 <https://www.chokotto.jp/>

© ZENKEI AI FORUM 2021, Printed in Japan

【月刊 ZENKEI AI MAGAZINE 2021年2月号】

目次

まえがき

第1章 当日のイベントの模様

第2章 はじめに

- 2.1 追悼 Chick Corea
- 2.2 「忍耐力」
- 2.3 今日の数理ネタ

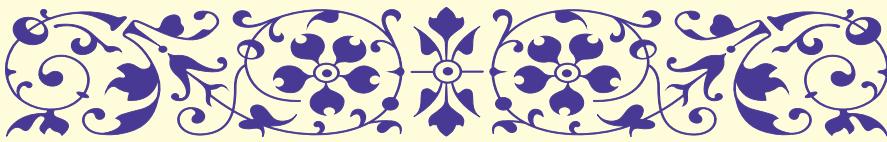
第3章 AI 最近の話題から

- 3.1 はじめに
- 3.2 実際に、試してみよう！
- 3.3 vballoli/nfnets-pytorch
- 3.4 timm - PyTorch Image Models
- 3.5 論文を読んでみよう！
- 3.6 AGC を使ってみる - vballoli/nfnets-pytorch 篇
- 3.7 AGC を使ってみる - timm 篇
- 3.8 世間の情報を探してみる

第4章 『月刊 ZENKEI AI MAGAZINE』創刊

- 4.1 前兆
- 4.2 妄想と共に
- 4.3 閃き
- 4.4 計画
- 4.5 共同執筆
- 4.6 創刊号、完成！
- 4.7 表紙について
- 4.8 終わって……ない

編集後記



まえがき

2021年1月からスタートしたZENKEI AI MAGAZINE (ZAM) の2月号です。プロジェクトは立ち上がりがとても大切です。特に継続するかしないかは、一步目よりも二歩目が、つまりこの2月号はZAM計画 자체を決める事になるくらい大事なものだと感じています。とは言っても結局1つ1つ確実に歩を進めることができるのは肝要でしょう。

どういう訳か2021年2月のZENKEI AI FORUMは発表者がわたし(市来)一人だったので、このZAM2月号は必然的にわたし一人が執筆となります(こうなった理由は分かっていて、要するに発表者を手配する余裕がなかったのです)。ということで、今号の記事はわたし、市来健吾が全て書くということで、本文には執筆者名の表記は省略します。

そんなこんなで、気づいたらもう数日で3月のイベント開催日、つまりZAM2月号の締め切り日ということになってしまいました。ZAMという車輪をきちんと前に回すために、この2本目の雑誌を今は肃々と書いていこうと思います。

2021年3月31日

金沢にて

ZENKEI AI MAGAZINE 編集長

市来健吾



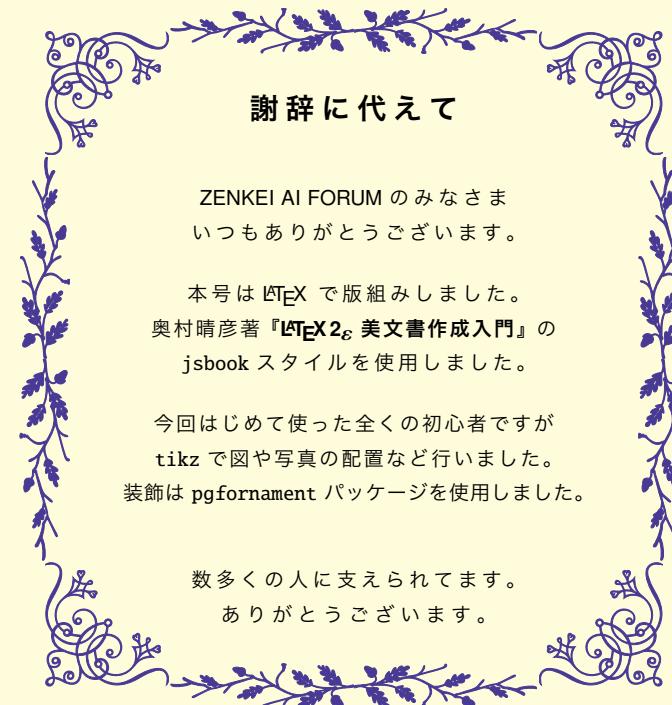
謝辞に代えて

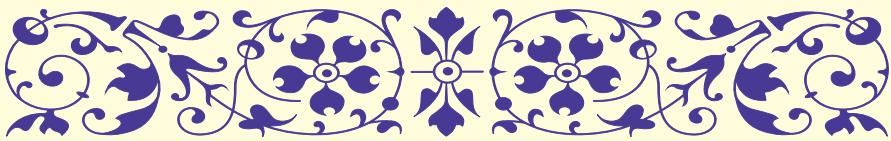
ZENKEI AI FORUMのみなさま
いつもありがとうございます。

本号は \LaTeX で版組みました。
奥村晴彦著『 $\text{\LaTeX} 2\epsilon$ 美文書作成入門』の
jsbookスタイルを使用しました。

今回はじめて使った全くの初心者ですが
 tikz で図や写真の配置など行いました。
装飾は pgfornament パッケージを使用しました。

数多くの人に支えられています。
ありがとうございます。





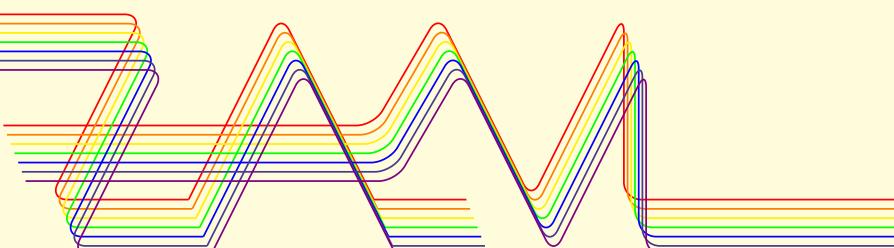
編集後記

本文にもたくさん（愚痴のように）書きましたが、なんとか『月刊 ZENKEI AI MAGAZIN』の2冊目、2021年2月号が仕上りました。

ZENKEI AI FORUM の文字化、ということで、2月の登壇者がわたし一人という事態に（ZAM 2号目で）なってしまい、結局これってこれまでの単行本書いてた『技術書典』じゃないか、と思ったりもしました。しかし書き終わった今、これも1つの通過儀礼だと思っています。

これからも、がんばります。

（市來健吾）



2021年2月24日

当日のイベントの模様

久しぶりの（？）いちきの独演会になりました。いろんな人の幅広い話題を期待してたみなさま、すみませんでした。（いろいろ立て込んでいて、フォーラムの計画やスピーカーの手配など、計画立案している余裕がありませんでした。）

とは言え、いざ始まってみるとオーディエンスとしてフォーラムのみなさんが参加してくれて、とてもうれしかったし、イベントとして単調にならなくて助かりました。



ZOOMにはMattさんとあらんさんがきててくれて、トピックの合間の座談タイムでいつものわたしの無茶振りな質問に（一部、英語になりましたが）答えてくれました。またYouTubeのチャッ

トには furukawa さんがきててくれて、コメントいただきました。みなさん、いつもありがとうございます。

内容は、これから紹介していくように、以下の3つのトピックを話しました。

- 【第2章】はじめに

ここ1ヶ月の時事ネタから話題をピックアップ

- 【第3章】AI 最近の話題から

最近画像分類で SOTA を更新したと話題の NFNets を紹介

- 【第4章】『月刊 ZENKEI AI MAGAZINE』創刊

1月のフォーラムで創刊すると宣言した ZAM を実際に刊行



4.8 終わって……ない

4.8 終わって……ない

という報告を持って、めでたく2月の（わたし、市來健吾の独演会になってしまった）ZENKEI AI FORUM は無事終了！

と思ったのですが、実は ZAF の終わりは ZAM の始まり、という仕組みを（自分で）作ったんですね。

そういうことで、この瞬間から ZAM 第2号の編集作業が始まります。（と、今ここに必死にこの ZAM 第2号を仕上げるために書いています。）

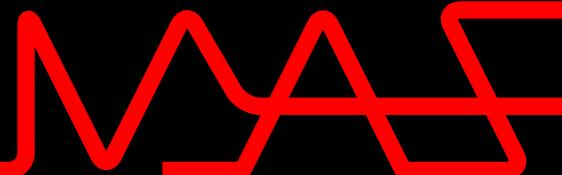
ちなみに本号の表紙デザインは、いつも ZAF や『技術書典』イベントでたくさんイラストを描いてくれている furukawa さんにお願いしました。





。をもひあさひ思ひひと式のま
ね
。をひておち宝固ひ露豊かZASひ顕実。式も
で詳目のZASひうご(yisrevib)封歎多。Jハ

。をひてせで辦奏の音肝鳴。アコスヒテ
代はな。アコスヒテモ。式もJ当時ひJ式
でヤセの(CD)。アコス。めぬをすんばき
Jテ映像即ち。めぬをすんばき
ZASのアコス。アコスでトセテ人素。式
J贅自画自式アコス。アコスでトセテ人素。
。をひ



2021年2月24日

Zoomライブ 月刊ZAM創刊！ほか ZENKEI AI フォーラム

第2章 はじめに

発表者が自分だけとは言え、ウォーミングアップは必要だろうということで、いつも通り「前座」をやりました。内容は、時事ネタを3つほど取り上げて、しゃべりました。

2.1 追悼 Chick Corea

ichiki kengo @ichiki_k · Feb 12
RIP Chick
カタリーナで聞いた時サインもらったな。こないだ金沢でも聞いた。
Facebook の毎日練習ビデオはコロナ禍の中元気をもらった。
一曲あげるっていうのは難しいけど、まずはこれかな

Chick Corea - My One & Only Love
"now he sings, now he sobs" 1968 album My One & Only Love (wood/melin)chick corea (p)miroslav ...
[youtube.com](https://www.youtube.com)

ichiki kengo @ichiki_k · Feb 13
チックは普通の（ジャズの）カッコよさに拘らず自由だったのかなと思う。
Piano Improvisations Vol.1 の A 面がやっぱりよい。Noon Song や Song of the Wind（元々ビルエバンスに贈った曲）あと B 面の 4 曲目は、やっぱり What Game Shall We Play Today だな

Livestream Highlights: What Game Shall We Play T...
Chick practicing "What Game Shall We Play Today", which was first recorded back in 1972 on Return to ...
[youtube.com](https://www.youtube.com)

このひと月の間に起こった出来事の中で、個人的に一番大きな出来事は、Jazz Pianist の

Chick Corea 氏が亡くなったというニュースでした。

わたしは家にテレビがないので、日々のニュースなどはインターネットを通じて目にすることになります。主に Twitter のタイムラインで、フォローしている人たちのつぶやきから「ああ、こんなことが起きてるのか」と知るのでですが、Chick の訃報も最初だれかミュージシャンの人が急に古い Chick の曲か写真を（具体的なコメントなしに）ツイートして「まさかね」と思ってあちこち調べたら、フォローしている彼の Facebook のアカウントに「2月9日、79歳で亡くなった」との投稿がありました。

訃報に接した後、徒然につぶやいたツイート (https://twitter.com/ichiki_k/status/1360031015377330188) のスクリーンショットを添えておきます。

わたしはこれまで2度 Chick Corea の演奏を生で見たことがあります。1度はアメリカ

の LA 郊外に住んでいた頃（1997 年から 1999 年）、2 度目は数年前金沢に Vigil というバンドで来た時です。

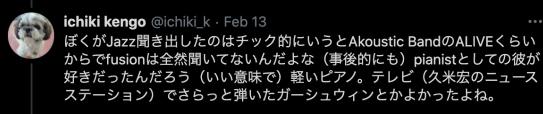
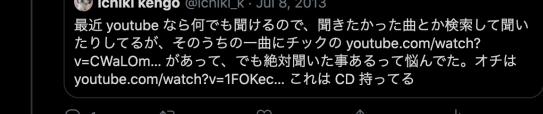
だったんだよね。

Translate Tweet



1:21 PM · Feb 13, 2021 · Twitter Web App

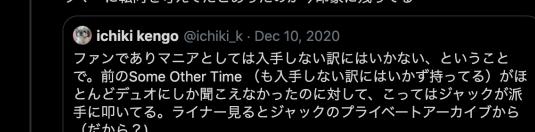
LA でのライブは当時結成したアコースティックなバンド Origin で、既に持っていた CD を持つて行って、そこにメンバー全員のサインをもらったのはいい思い出です。



Chick は世間的には Return to Forever でのエレクトリックな侧面が有名ですが、わたしが聴き始めたのはそのブームが終わった辺りからで、ちょうど "Akoustic Band" くらいから（リアルタイムで）聞いてきたことになります。その後、彼のキャリアを遡ったりもしましたが、個人的に Piano が好きというのもあって Pianist としての Chick がわたしにとっての Chick です。ツイートでも何曲か好きな演奏をピックアップしました。

- My One and Only Love
- Song of the Wind
- Someone to Watch Over Me
- Yellow Nimbus

網羅するのは無理だし、かなり偏った選曲ですが。



ました。実際に ZAF は話題が固定されていないし、多様性 (diversity) こそが ZAF の目指す

ものだ、という思いもあります。



そういうことで、創刊号の表紙デザインはわたし担当しました。コラージュって、なんか好きなんですよね。レコード (CD) のジャケットとかでも Pat Metheny Group は印象的でした。素人デザインですが、これまでの ZAF を振り返りつつ、いい感じにできたと自画自賛しています。

ています。

今後、各号の表紙デザインはそのときどき、才能あふれる ZAF メンバーなどに声をかけて、見た目も楽しい雑誌にならいいな、と思っています。

雑誌!

り PDF がメインになると思いますが、web 版、epub 版もコマンド一発で出力できます（基本的に）。ただし、やはり細かいデザインとか気になる部分が出てきます（表紙ページ、裏表紙ページの扱いや、目次、ページ遷移のリンクなど）。今回は一度出力された HTML を手で修

正して最終版としました。

『月刊 ZAM 2021 年 1 月号』 web 版のリンクは <https://zenkei-ai-forum.github.io/ZAM202101/> PDF 版は <https://zenkei-ai-forum.github.io/ZAM202101/ZAM202101-v2.pdf> になります。



web 版『月刊 ZAM』創刊号のスクショ



PDF 版『月刊 ZAM』創刊号のスクショ

4.7 表紙について

雑誌といえば、表紙ですね（もちろん中身も大事ですが）。雑誌は定期刊行物であり、デザインはその雑誌の個性を反映する重要な要素であり、表紙はの中でも最も重要なデザイン要素になります。わたしの見た感じだと、表紙のデザインに対して、大きく 2通りの考え方があるようです。

- どの号も基本的に同じデザイン

• 各号ごとに全く異なるデザイン

前者が majority かな？ 背景写真くらいが入れ替わったくらいで、雑誌のタイトルが大きく入り、そのデザインはずっと同じデザインのタイプ。後者は、各号おそらくデザイナーが変わって、内容に応じたデザインを採用するタイプ。各号の特集に応じてガラッと異なった表紙デザインになっている『WIRED』（日本語版）が印象に強くあります。今回 ZAM を創刊するにあたり、わたしの念頭にはこんなイメージがあり

2.2 「忍耐力」

実際に去年の春頃のコロナ禍による（自主的）ロックダウンに伴う環境の変化に際してわたしの気持ちを支えてくれた大きな要素の 1つは音楽で、その中でも Chick が Facebook で毎日配信していた練習ビデオでした（と実際につぶやいてますね https://twitter.com/ichiki_k/status/1242301669200674816）。

ichiki kengo @ichiki_k
ここ 3 日かな、Facebook で連日チックが iPhone で練習風景という名の自宅ライブ的なストリーミングやってる。考えたら、彼らにとってこれは商品な訳で、すごいことだよなと。
あと、素朴なレベルで、日々きちんと鍛錬する人間はすごいなと思った。

1:06 PM - Mar 24, 2020 - Twitter Web App

ichiki kengo @ichiki_k · Mar 31, 2020
Replying to @ichiki_k
自分は弱い人間のよう、こことこ世間の動向をみてて凹み気味なんだが、そんな自分を救ってくれるのは、無邪氣でいつもとおんなじ動物たちと、111 日になってもまだ継続しているチックのライブ動画。

2.2 「忍耐力」

NASA's Perseverance Mars Rover
465 Tweets

NASA's Perseverance Mars Rover

NASA Mars rover. Launch: July 30, 2020. Landing: Feb. 18, 2021. Hobbies: Photography, collecting rocks, off-roading. Team HQ @NASAJPL

④ Jezer Crater, Mars mars.nasa.gov/mars2020 Joined February 2020

44 Following 2.2M Followers

みなさんは英語は得意ですか？ 授業や受験でたくさん英単語を覚えましたね？ “perseverance” という単語は、大学受験で出てきたかちょっと記憶が怪しいですが、意味は分かりますか？ 分からない人でも今この単語を目にしたりしてると思いますが、思い当たらないかな？ あ、分かった。それはきっと悪しきカタカナのせいですね。わたしがこの英単語にカタカナを当てるとすると「パーシビアランス」ですが、ニュースなどを見ると「パーサヴィアランス」という表記を使っていますね。（太字はアクセントという気持ち。）

と、前振りが長くなりましたが、このひと月の間に起こった出来事のもう 1 つの話題は火星探査機 Perseverance の着陸成功のニュースです。（公式ツイッターアカウントはこちらです。<https://twitter.com/NASAPersevere>）

当日のビデオでもコメントしましたが、わたしたちは地球の上で日々あくせく暮らしていますが、人類は宇宙に向かって着実に進んでいるんだなあ、と感じました。わたしが大学の頃か

ら大好きだった Star Trek: The Next Generation のオープニングのナレーションを引用しておきましょう：

Space: the final frontier. These are the voyages of the starship Enterprise. Its continuing mission: to explore strange new worlds. To seek out new life and new civilizations. To boldly go where no one has gone before!

2.2.1 大丸拓郎さん

今回この火星探査機 Perseverance のことを知ったきっかけの1つに、現在 NASA JPL で働いている日本人の大丸拓郎さんの Twitter の一連の投稿がありました。しばらくは「へえ、日本の人人が NASA でバリバリやってるんだな、すごいな」と普通に感心してたんですが、今回の盛り上がりに際して大丸さんの Note の記事『日本人が NASA で働くには』(<https://note.com/takurodaimaru/n/n17e74fc49339>) を読みました。そして、いろんな意味ですごい人だなとの思いを深くしました。

この記事は大丸さんが現在の職場 (JPL) に至るまでの人生を振り返ったものです。そういう形でまとめた故なのか、彼自身がきちんと計画し、行動し、達成するタイプの人なのか（おそらく、その両方なんでしょう）本当に1つの目標 (JPL で働くこと) に向かって継続的に着実に歩みを進めて行ったんだなあ、と。これを読んで、有名な Steve Jobs の Stanford 大学の 2005 年の卒業式でのスピーチで喋った “connecting the dots” の話を思い出しました。そこで彼は、

人生において、点と点の間に線がつな

がっているのは、その時には分からぬけれど、事後的に、あとで振り返った時には、明瞭に見えるものだ

(意訳) とも語っていました。わたしが感じたのは、「今」にいる自分はとにかく「今」に全力を注ぐのが正しいのだろう、その積み重ねをあとで振り返ると、そこに意味や結果が見えてくるのだろう、と。

あと今回きちんと大丸拓郎さんの記事を読んで、自分とダブルところがいくつかあって、勝手に親近感がアップしました。1つは大学が同じ（トンペイこと東北大学）ということ。あと1つは JPL（これは最初から、そうだなと思ったことですが）。知らない人は知らないことですが、歴史的な経緯があって NASA の JPL ことジェット推進研究所というのはカリフォルニアにあって、それは元々ここが Caltech の研究所だったからのようなようです。「Pasadena 懐かしい」という、これも一方的な親近感アップポイント。

と同時に、彼とわたしの違いもひしひしと感じました。わたしは人生を振り返ると、結構、無自覚に生きてきたなと思います。恐らくゴーラ指向で生きてないということなのかな。一方、大丸さんは明確な目的意識を持って、きちんと戦略的に計画をたてて、きちんと行動してきたんだな、と。こう言う部分で人生に「差」が付くんですよ、と若者のみなさんにアドバイスしたいですね。

大丸さんの Note にもいくつかエピソードとして出てきますが、人生のいろんなことを決定する要素は結局「人」だと思いました。その時大切なものの、つまり相手を動かす重要な要素は、こちらの「熱量」だと。複数形の“we”で



4.6 創刊号、完成！

の執筆に使われていて、「本」「単行本」という形式（文字がメインのコンテンツ）においては必要十分だと思いますが、今回わたしたちが作っている『月刊 ZAM』は「雑誌」です。雑誌といえば、カラフルな写真やイラストが誌面にあふれ、デザインもバリエーションがあります。それがんまりできそうにない。この辺のことは、上にも書いた共同執筆という状況と、創刊号はまず出すことが大事ということで、この縛りの中でがんばることにします。共同執筆に関しては、基本的に各人が担当の章を書くという形だったので、原稿の投稿が GitHub への push になった（だけ）でした。

(4) 執筆

文書の構成は catalog.yml で定義されていて、そこに Markdown で書かれた文書を指定する。今の場合、

PREDEF:

- preface.re

CHAPS:

- intro.re
- ichiki.re
- furukawa.re
- nakano.re

APPENDIX:

- contributors.re

となっている。

「著者紹介」を修正したいときは contributors.re を編集することになります。

参考資料

- docker hub の Re:VIEW イメージ (vakameさん)
- Re:VIEW イメージ Windows 用の手引書 (vakameさん)
- Re:VIEW のテンプレート (TechBoosterさん) ^①
- Re:VIEW 公式サイト ^①
- Re:VIEW ナレッジベース

環境設定から執筆までの簡単な手引きをオンラインフォーラムに投稿しました。興味ある方はご自身のコンピュータにセットアップして、ZAM202101 レポジトリ (<https://github.com/zenkei-ai-forum/ZAM202101>) を clone して、手元でビルドしてみてはどうでしょうか。

4.6 創刊号、完成！

今回の執筆陣は（わたしを除いて）きちんとスケジュール管理ができる『技術書典』を潜り抜けてきた人たちなので、予定通り 2 月の ZAF に無事、記念すべき創刊号であるオンライン版『月刊 ZAM 2021 年 1 月号』発行となりました！（つまり、わたしの原稿が一番遅かった、ということです。でも、雑誌創刊にあたり書き下ろす「巻頭言」とか、表紙のデザインとか、いろいろとあったんですよ。）

Re:VIEW の利点として、1 つのソースで複数のフォーマットに出力できるということがあります。（電子）書籍の執筆においてはやは

Re:VIEW のセットアップと使い方

前提事項

- docker のインストール、設定が完了していること
- git のインストール、設定が完了していること
- ネットがつながっていること

(0) git bash などターミナルから、まず docker が使えるか確認

```
$ docker --version
Docker version 20.10.2, build 2291f61
```

(1) docker hub にアップされている Re:VIEW の docker image を pull

```
$ docker pull vakame/review
...省略...
Status: Downloaded newer image for vakame/review:latest
docker.io/vakame/review:latest
```

(2) 文書を clone してくる (2 回目以降は fetch)

例えば、今 ~WORK にいて、そこに zenkei-ai-forum というディレクトリを掘って、そこに ZAM202101 を clone する場合、

```
$ mkdir zenkei-ai-forum
$ cd zenkei-ai-forum
$ git clone https://github.com/zenkei-ai-forum/ZAM202101.git
$ cd ZAM202101
```

(3) 文書の生成

以下、文書の生成、変換は、ここ (ZAM202101) で Re:VIEW のコマンドを実行。

(3a) PDF を作る場合

```
$ docker-compose run --rm review rake pdf
これで ZAM-202101.pdf ができるはず。
```

(3b) EPUB を作るとき

```
$ docker-compose run --rm review rake epub
これで ZAM-202101.epub ができるはず。
```

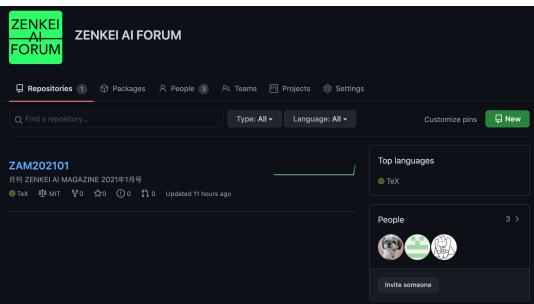
(3c) WEB ページを作りたいとき

```
$ docker-compose run --rm review rake web
これで webroot フォルダができるはず。
```

- Docker image が提供されている

ことが主なポイントでした。Docker 環境は、実は、電子書籍の執筆環境を複数の執筆者の間で揃えることを考えると、極めて大きなポイントだと思います (\LaTeX をみんなそれぞれインストールしてね、というのに比べて)。

共同執筆に関しては、ツールの選定の他に、作業環境の共有というか各人の原稿のやりとり方法についても悩みどころです。この点に関してはエンジニアっぽく GitHub を使おうと思っていました。GitHub は一般にはプログラム開発においてソースコードを共同で修正していくために使われますが、文書執筆や書籍編集もソースコードの共同編集に変わりはありません。それにもう1つの利点として GitHub のレポジトリを作ると、もれなくそのレポジトリに対応した web page (GitHub の用語でいう "GitHub Pages") を作ることができます。つまり『月刊 ZAM 2021 年 1 月号』のレポジトリを作って、そこで原稿を共同編集してきたコンテンツの web 版を置く場所も自動的にできるということになります。



ということで、まず zenkei-ai-forum という組織アカウント (GitHub の用語でいう "organization") を作り、そこに ZAM202101

というレポジトリ (<https://github.com/zenkei-ai-forum/ZAM202101>) を作りました。

Kengo Ichiki merge branch 'Yoshi' into main
copy articles from TechBooster/RvE-W-Templates
Merge branch 'Yoshi' into main
copy articles from TechBooster/RvE-W-Templates
copy articles from TechBooster/RvE-W-Templates
copy articles from TechBooster/RvE-W-Templates
add file for Windows environment
Initial content
Initial content
copy articles from TechBooster/RvE-W-Templates
copy articles from TechBooster/RvE-W-Templates
add cover and backcover pages
2 days ago

このレポジトリをプログラム開発よろしく、各人が自分のコンピュータに clone して加筆して commit して push して、他のメンバーが pull して加筆して commit して push して、と。なんか AI FORUM って感じですね。

Re:VIEW 共同執筆環境 (?)
これで、みんなで書こう！
どうか、github に ZAM の WEB 版を置く場所として、zenkei-ai-forum の organization を作りました。

ZENKEI AI FORUM
ZENKEI AI FORUM has one repository available. Follow their code on GitHub.

で、月刊で出す（フリー版）ZAM のコンテンツをレポジトリとしようというつもり。
創刊号（2020年1月号）のレポジトリは以下になります。

github.com 3
zenkei-ai-forum/ZAM202101 3
月刊 ZENKEI AI MAGAZINE 2021年1月号。Contribute to zenkei-ai-forum/ZAM202101 development by creating an account on GitHub.

環境が整ったので、今回の執筆メンバーに声掛けして、実際に創刊号の執筆が始まりました。実際の（共同）執筆は順調に進んだか、と言うと必ずしもそうではなかったです。わたし自身が感じたことは Re:VIEW の表現力が限制的であること（ここでの比較の対象は \LaTeX になりますが）。実績として沢山の技術系同人誌

2.3 今日の数理ネタ

はなく単数形の "I" できちんと立って勝負する姿勢だと。その上で成立する「人と人のつながり」こそが大切だと（自分の人生を振り返って）感じた、という話は拙著『厳密な計算』にも書きました。こういう認識を確認できたことが、この本を書いたいちゃんの収穫でしたね（我田引水）。

技術書

技術書典10

【物理本+PDF+おまけ付】 厳密な計算 ふたつの球の なめらかなダンス

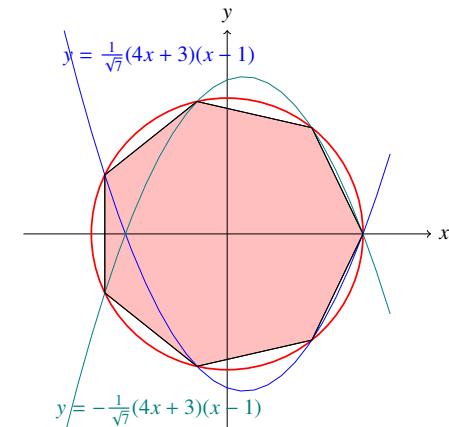


2.3 今日の数理ネタ

『数理クイズ』の、これまでのまとめ（つまり回答編）を「やります！」と言い続けて数か月がたちますが、すみません。今月もバタバタしていて準備ができていません。ということで、今日もお話だけです。それでも面白い話があったので紹介します。以下のツイート (<https://twitter.com/potetoichiro/status/1360811105442926592>) です。

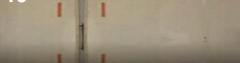
【吃驚仰天！ 正七角形！？】
なな、なんと、円と2本の放物線の交点を結んで正七角形をつくることができるそうです。先ほど初めて知りわたしもやってみました。そして、その美しさに感動しました。松田康雄先生が発見し、2019年に算額が高見神社に奉納されたとのことです。いくつか実物を見に行きました！

正多角形ですから、円周上に載ることは自明ですが、同時に2本の放物線の上に載る、つまりそれらの交点として決まる、と。美しい。



2021年2月24日

10



Zoomライブ 月刊ZAM創刊！ほか

ZENKEI AI フォーラム

第3章

AI 最近の話題から

みなさん、画像分類、好きですよね？今日は最近 DeepMind から出た論文で、画像分類の SOTA となった NFNets を、サクッと紹介して、ドヤッとしたかった（けど、オヤッとなつた）という話です。

3.1 はじめに

日常的なニュースも、技術的なのはなしも、Deep Learning に関する最新の話題も、最近わたし Twitter のタイムラインに依存してしまってます（フィルター・バブルにはまっていることをきちんと自覚して、その上でツールとして利用できる部分は利用していくよと思ってます。ミイラにならないように）。今回の NFNets の件も最初は Twitter でした。Kaggle の強い人、という認識のある phalanx さんのツイート (<https://twitter.com/ZFPhalanx/status/1363622203917443072>)

nfnet、過去コンペで試してるけど
毎回こんな感じで結構ヤバイ。

です。論文に載ってる結果ではなく自分で計算したらしい図をみると、「SOTA 更新！」とい

うニュースによくある「コストがちょっとかかるけど精度は少し上だね」というレベルではなく、同程度の精度を得るのに必要な epoch 数が既存の 40～50 に対して 10 と圧倒的に速い。

それでちょっと真面目になってググって、論文を見つけました。“**High-Performance Large-Scale Image Recognition Without Normalization**” (arxiv: 2102.06171) です。PDF をダウンロードして著者 (Andrew Brock, Soham De, Samuel L. Smith, Karen Simonyan) の所属を見て、ちょっとびっくりしました。あの AlphaGO で有名な DeepMind でした。「画像分類の論文なんて出すんだ」と思いました。今時の論文は 1 ページ目で一番大事な図を載せるんですね。ということで（本文はまだほとんど読んでない段階で）その目玉の図1をみると、確かに画像分類で SOTA を達成した

4.5 共同執筆

- 季刊（あるいは年数回）で刊行
- 無料版の月刊の内容をまとめる
- 書き下ろしコンテンツなどを追加
- タイミングが合えば『技術書典』などのイベントで販売

というイメージです。刊行が進んで書き下ろし連載の内容が増えてきたら、それを「単行本」としてまとめて出版することもできます。「有料版 ZAM」の売り上げは ZAF に、単行本の売り上げは（これまで通り）執筆者に還元すれば、よい循環ができるかなと思っています。

4.5 共同執筆

『ZAM 創刊』を 2021 年 1 月の ZAF で（なんら根回しなしにいきなり）発表しました。成り行き上、言い出しちゃの法則でわたしが編集長に就任することにして、早速 1 月の ZAF の内容をベースに創刊号の執筆、編集作業を開始しました。

ichiki 27日 昨日（2021年1月27日）のフォーラムで、ぼくが勝手に口走りましたが、一晩寝て起きて思い返しても我ながら、いい考えだなと思っています。
フツッと思ってる構想を書いておきます。意見あればどんどんあげてくださいね。

- 每月のイベントごとに、無料版として、月刊で刊行
- 季節ごとに、つまり技術書典イベントごとに（3ヶ月？半年）、合本化して有料版を刊行
- 売り上げはフォーラムのお金とする

内容のメインは、イベントの文字版。（無料版はこれがベースになるイメージ）
寄稿は歓迎。
書き下ろし企画を（編集部=ぼく）から依頼もある。
(これらは、有料版のポイントになるものという位置付け。)

タイトルは、上に書いたように『ZENKEI AI MAGAZINE』が分かりやすくていいかな、ど。
どうでしょう？

2 27 11時間 25 79 3 21 8 リンク

23

まずオンラインフォーラムにスレッドを作りました。<https://forum.ai.zenkei.com/t/topic/349> 次に『月刊 ZAM』創刊号の執筆者、つまり ZAF 1 月の講演者の二人、古川さんと中野さんに早速原稿依頼しました。



ichiki

原稿依頼

ということで、気を取り直して、創刊号の無料版のメインコンテンツである、先日のイベントの内容を、発表いただいた @furukawa さんと @YutakaNakano さんに寄稿していただきたいと思います。形式は、

- パワポ原稿そのまま
- 自分で文字コンテンツとしてまとめた PDF
- 今回使うおもてがけ ReVIEW で使いやすく書いたテキスト

いずれでも、それなりに編集側（つまりオレ）で対応しようと思っています。

よろしく！

ちなみに「なんで Jupyter Book 使わないんだ！」という点、というか「なんで ReVIEW 使おうと思ったのか」については、出力形式としては PDF 以外に EPUB があるってことなんですね。これがあれば（導入は簡単） Kindle 化して Amazon で売れるらしい。と。（あと、ちょっと気になつて Adobe の InDesign への出力もあるようなので）

2 27 11時間 25 79 3 21 8 リンク

さて、この時点ではツール、つまり何で執筆するのかはまだ決まっていませんでした。幸い 1 月の ZAF は『技術書典 10』の振り返りということで、二人ともそれぞれ同人誌執筆の経験はあるので、なんとでもなるだろうと思っていたし、発表の素材をパワポでもワードでもプレーンテキストでもらえれば、最悪「編集長（わたし）頑張る」でもよい、と考えていました。

とは言え、ソロで執筆するのと、共同で 1 つの書籍を執筆するのは、やはり違います。新しい経験という意味では興味深いものです。締め切りが迫っている（何しろ次回の ZAF までの約 1 ヶ月のうちに仕上げなければならない）こともあり現実的に考えて今回は Re:VIEW を使うことにしました。理由は

- Markdown で書ける（LaTeX より簡単だろう、という意味）
- Techbooster さんによるテンプレートがある



オンラインフォーラム 1月 29日の古川さんの投稿
(<https://forum.ai.zenkei.com/t/topic/340/43>)

4.4 計画

“How to start a movement”という約 10 年前の 2010 年の TED の有名な講演の 1 つ、Derek Sivers によるわずか 3 分ほどのとても明快なビデオがあります (<https://youtu.be/V74AxCq0Tvg>)。まだ見たことのない人には是非人生の 3 分を投資することをお勧めします。そこでのフォーカスは「どうやって」活動を始めるか、その活動を成功に導く大切なポイントは何か、でした。今ここで「爆誕！」と言っている ZAM もそういった「活動」の 1 つです。「どうやったら成功するか」というのは気にならないと言えば嘘になりますが、今の時点ではむしろ、どうやったら継続的な、今風に言えば sustainable な活動になるのかにわたしの関心はあります。何かを始めること（ゼロを 1 にすること）はそれ自体大変と言えば大変ですが、気合いとか勢いで結構できてしまうものです。それに比べて、そうやって勢いで始めた活動を継続することは、始めることに比べるとずっと大変なことだと思います。

難しい問題に取り組むには計画が必要です。ということで始めるにあたってあれこれと構想を練ってみました。まず考えたのは「無料版」と「有料版」を分けるという考えです。「無料

版」は、

- 月刊で、無料で誰でも読める形で、全世界に公開
- 内容は、毎月開催している ZAF の内容がベース
- 発行は毎月の ZAF 開催日で、前月の内容の ZAM を出す

という形。既に毎月イベントを運営してきた経験があるし、イベントのコンテンツはあるので、それほど無理をしなくても実施できるでしょう。ZAF のイベントが基本的にオープンなイベントなので必然的に『月刊 ZAM』もオープンアクセスな雑誌にします。

ただそれだけだと、せっかく「雑誌」という媒体を作るのにもったいない気がしました。雑誌といえば「連載コーナー」ですよね。ZAF サークルとしてこれまで 2 度の『技術書典』で 4 冊の本を企画、出版してきました。これらは「単行本」であり、執筆者それぞれのソロ活動的な側面があります。執筆へのハードルという意味では、雑誌への寄稿という形になると一度の執筆の分量が減るので、その結果サークルメンバーの執筆活動への参入を促すだろうという思いもあります。「有料版」は、

3.2 実際に、試してみよう！

らしい。これまでの SOTA だったモデルが比較としてあれこれ出ています。例えば **EfficientNet**。これはしばらくすごいすごいと言われていて、実際にわたしも使ったことありました (cf. [github: lukemelas/EfficientNet-PyTorch](https://github.com/lukemelas/EfficientNet-PyTorch))。**LambdaNet** というのも最近話題のぼっていましたが、こちらはまだきちんと勉強できていません。これらのモデルに対して精度と学習時間をプロットした図が示されていますが、精度は高く、学習時間も短く、しかも他のモデルはかすりもしない。先の phalanx さんが論文とは別のデータセットで同様な結果を示していたことと、著者が DeepMind ということで、よくありがちな、いい結果だけをピックアップした、という訳ではなさそうという印象で、期待が膨らみます。

今回は ZAF の『最近の話題から』ネタとして紹介するつもりだったので、手早く使えるソースコードを探しました。DeepMind 自身も GitHub でソースコードを公開していましたが、TensorFlow ベースで、かつ JAX を使ってるよう (詳しくないので) パス。PyTorch での実装がないかと調べたら、以下の 2 つのコードがヒットしました。

- [github: vballoli/nfnets-pytorch](https://github.com/vballoli/nfnets-pytorch)
- [github: rwrightman/pytorch-image-models](https://github.com/rwrightman/pytorch-image-models) の中の nfnet.py

先に進む前に一言、ここまで “NFNets” と呼んできましたが、これはどう言う意味かというと “Normalizer-Free Networks” ということです。ここで言っている normalizer というのは batch normalization layers のことです。

3.2 実際に、試してみよう！

ZENKEI AI FORUM で画像分類といえば何は無くとも「五郎島」ですね。ということで先日 ViT や BYOL で試した 8 階級分類のデータセットを使って、実際に NFNets の実力をみていきましょう。

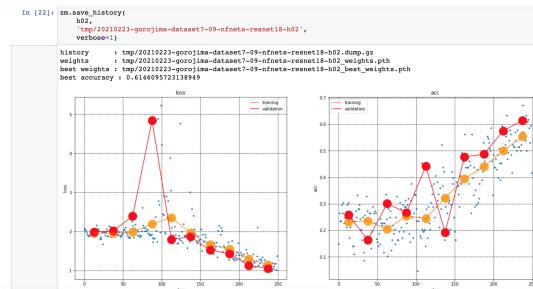
3.3 vballoli/nfnets-pytorch

先ほど探して見つけた PyTorch 実装の 2 つの中、まず最初に vballoli/nfnets-pytorch のコードで実験していきましょう。インストールは pip で簡単にできました。

```
$ pip install nfnets-pytorch
```

実際に使い方は、既存のモデルに対して、対応する畳み込み層を置き換える関数 replace_conv() を適用することで NFNets 化します。

そのモデルを既存の zenkei_ai のトレーニング関数で学習させてみましたが、どうもうまく学習してくれません。



この図を見ると validation accuracy が 60% を超えていますが、元々このデータセットは ResNet18 を使うと 10 エポックもかからない

で 90% を超えることを考えると、うまくいっていません。

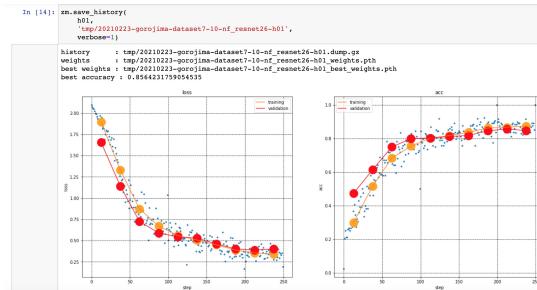
3.4 timm - PyTorch Image Models

次に、たくさんのモデルを含んでいて評判の高い `timm` ([github: rwightman/pytorch-image-models](https://github.com/rwightman/pytorch-image-models)) を試してみることにします。(ちなみに、どうして PyTorch Image Models が `timm` か、というと PyTorch Image Models と言うことのようです。難しい。) `timm` 自体のインストールは `pip` でもできますが、今使いたい NFNets は最新のコミットが必要なので `github` から直接 `clone` してくる必要がありました。この `clone` してきたフォルダをパスに追加してモジュールをインポートすると、`nf_resnet26` などの NFNets モデルを使うことができます。

```
jupyter 20210223-gorojima-dataset7-10 Last Checkpoint: 21 hours ago [jupyter]
File Edit View Insert Cell Kernel Navigator Widgets Help
In [1]: rm -avv history
          h01,
          tar/20210223-gorojima-dataset7-10-nf_resnet26-h01,
          versioneer-1
history : i: tar/20210223-gorojima-dataset7-10-nf_resnet26-h01.dump.gz
weights : i: tar/20210223-gorojima-dataset7-10-nf_resnet26-h01_weights.pth
best_accuracy : b: 0.8544231793954521
ZENKEI AI FORUM ZOOM LIVE 2021/01/27
[書籍] 難解な言語
[書籍] 家業
[書籍] Python Book
[書籍] 統計学入門
[書籍] 量子力学入門
Zoomライブ
2021年1月27日
ZENKEI AI フォーラム
△△△
2021年最初のAI FORUM

こんなことをあれこれと、あてもなく考えながら迎えた前回 2021 年最初（2021 年 1 月 27 日開催）の ZAF の自分の発表を準備していたときに閃きました。「雑誌を作ろう」と。わたしは定期的に「ひらめいた！」と叫んでいますね。)
https://twitter.com/ichiki_k/status/1353165698684473346
#技術書典 9 で出した「音楽と数理」才能にようない耳コピ! 紙の本は BOOTH で販売中です! #ZAF2021 で雑誌販売中ですが、「お宅から発送」バリエーションを追加しました。こちらは本体価格を戻した代わりに、おまけとして今回作った「幸せの黄色い『音楽と数理』ミニタオル」を付けます。よろしく!
数 理
耳コピ
[技術本PDF] 音楽と数理 才能にようない耳コピ_ZENKEI AI FORUM_ZAF
今後
• いちきの本は ZENKEI AI FORUM から外そうかな、と
◦ AIじゃない (audience が違う? )
◦ いちきの趣味本になっている
◦ (代わりに?) 雑誌みたいなの、やってみたい
◦ 同人といえば、雑誌でしょう、と
自分の子供のころからのことを振り返ると、今の自分って実際のところ雑誌で育ってきたんだなと思います。具体的に読んできた、影響を
しました(少なくとも「やるぞ」ということだけは)。
ZAM 爆誕 !
しました(少なくとも「やるぞ」ということだけは)。
```

ここではこの `nf_resnet26` を使うことにします。最初 10 エポック学習させてみると loss は下がり、先の `vballoli/nfnets-pytorch` よりは良さそうです。



この後も継続して 50 エポックまで学習を続けたところ、validation accuracy が 91.7% まで上がりました。この結果だけみるとうまく行ったように見えますが、先にも述べたとおりで、この五郎島データセットを普通の ResNet18 で学習させると 94% を超えるので、これでは SOTA を出したモデルとは言えませんね。まだ何か根本的に誤解しているか、使い方を間違っているようです。

3.5 論文を読んでみよう！

画像分類タスクのような単純な問題の場合、これまでに新しいモデルが出てきたら、まずネットに公開されている実装をそのまま使って、精度がどれくらい出るかを検証してきました。今回もそれで簡単に精度がアップすればうれしいなと思っていたが、うまくいきませんでした。

ということで、本来なら一番最初に行うべきことですが、改めて論文 ([arxiv: 2102.06171](https://arxiv.org/abs/2102.06171)) に目を通すことにします。(良い子の皆さんには、この手戻りを「反面教師」として、はじめから、

4.3 閃き

4.3 閃き

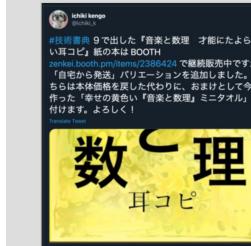
ZENKEI AI FORUM ZOOM LIVE 2021/01/27



2021年最初のAI FORUM

こんなことをあれこれと、あてもなく考えながら迎えた前回 2021 年最初（2021 年 1 月 27 日開催）の ZAF の自分の発表を準備していたときに閃きました。「雑誌を作ろう」と。わたしは定期的に「ひらめいた！」と叫んでいますね。)

https://twitter.com/ichiki_k/status/1353165698684473346



今後

- いちきの本は ZENKEI AI FORUM から外そうかな、と
 - AIじゃない (audience が違う?)
 - いちきの趣味本になっている
 - (代わりに?) 雑誌みたいなの、やってみたい
 - 同人といえば、雑誌でしょう、と

自分の子供のころからのことを振り返ると、今の自分って実際のところ雑誌で育ってきたんだな思います。具体的に読んできた、影響を

受け刺激を受けてきた雑誌を挙げると、

- 誠文堂新光社『子供の科学』(真ん中に厚紙の飛行機が付いてましたね)
- 『ラジオの製作』(わたしは『初步のラジオ』派ではありませんでした)
- 『月刊 I/O』(パックマンとかのパイトダンプを手で打ち込んでたな)
- 『トランジスタ技術』(昔の分厚かった頃のやつ、硬派でしたね)
- 『UNIX MAGAZINE』(大学の頃、UNIX 系の情報源といえばこれしかなかった)
- 『Jazz Life』(譜面がたくさん載ってる Jazz の本はこれしかなかった)

などがすぐ出てきます。こうして並べてみるとさすがに時代を感じますが、同時に、今本屋に行って手に取る雑誌がないものがあるように思います。わたしが好きだったこれらの（当時の）雑誌に共通して言えることは、読者を子ども扱いしない、素人扱いしない、という姿勢です。逆に言うと、今の雑誌（に限らず、メディア一般と言ってもいいのかな）は「分かりやすく」「受け入れられやすく」ばかりを優先し、本質的に大切な事柄を（意図のか否かは別として）結果的にスキップしていく、歯ごたえの無いふわふわして真っ白な食パンみたいになってる気がします。これでは読者は育たないだろうな、と思います。

脱線しました。いずれにせよ ZAF 2021 年 1 月のイベントで

ZAM 爆誕 !

しました(少なくとも「やるぞ」ということだけは)。

う) が、気付くと、大企業がアテンションを集めるロジックをそのまま個人レベルで行っている「やかましい」世界になっていて、そういう個人の自発的な活動で結局プラットフォームを握っているところが商売しているというビジネスモデルが成立している訳ですが、それで失われる(あるいは価値を認められない) しかし大切な「静かな活動」をどのように育んでいくのか、という問題意識を、わたしも (ZAF の活動などを通じて) 考えています。

ちなみに ZAP も TuneIn (<https://tunein.com/podcasts/Technology-Podcasts/ZENKEI-AI-Podcast-p1313880/>) で聞けます！もちろんその他のポッドキャスト・サービスからも聞けます。詳しくは ZAP サイト <https://zenkei.seesaa.net/> をご覧ください。

422 アンドレ・ヴェイコ

もう1つのツイートは「数学の歩み bot」さん(Auf_Jugendtraum)の以下のツイート(https://twitter.com/Auf_Jugendtraum/status/1361429835600470017)です。

共同研究に対する忠告を3つ.

先ず over organize し過ぎないこと.

次に、常に、あらゆる種類の失望に対し備えていなければならないこと.

失望は共同研究の一部であると考えるべきである.

第三にアイデアは集団から生まれるのでなく個人から生まれるということだ.
(アンドレ・ヴェイユ)

研究者（数学者）が共同研究をする上での心得ですが、上司が部下に仕事を振る時とか、自分

の手が回らない時に助けをお願いする時など、幅広く応用できるなど深く肯きました（実践できているとは言いませんが）。特に今回一番「そうだよな」と思ったのは最後の項。本来弱い存在である個人（および個人のアイデア）をどのように拾い上げるか、それを継続的に系統的に行っていくのか、という点。エンジニアという人種はともすると人月でものごとを計画しますが、ここが分かってないんだよな、と。（もちろん、タスクの内容によりますが。）

ところで、わたしが殊更にこのツイートに目が行った理由は「アンドレ・ヴェイユ」です。とは言っても（わたしは数学には詳しくはないので）彼の数学者の業績というのは何も知らないんですが、昔（何時ごろのことか忘れてしまいましたが、大学院の頃だと思います）ネットで見た彼の言葉（でありエピソードである）

数学は体力だ

が当時も、そして今もまだ強烈に記憶に残っているからです。改めてググってみると、当時のわたしが目にした記事（が転載されたもの）が見つかりました。みなさんも是非読んでみてください。『数学は体力だ！（木村達雄）』(<https://nc.math.tsukuba.ac.jp/column/emeritus/Kimurata/>) です。しかし改めて考えると、数学だけでなく人生は全て最終的には体力ですね。あと『体が資本』という言葉もあります。こういう言葉が響くようになる、ということが自分が年を取った証拠なのでしょうが、まだまだ若いみなさんも意識した方がいいですよ、と（いつもの）余計な事を言ってしまいました。

3.6 AGC を使ってみる - vballoli/nfnets-pytorch 編

きちんと論文を読むようしましょう！)

改めて読むと、この論文は「ポッと出」の仕事ではなく（さすがに DeepMind が出すだけのことはある）筋の通った論文でした。文脈としては、安定性のために導入され今や de-facto standard となっている batch normalization layers がない場合でもきちんと学習するための息の長い一連の仕事の 3 本目の論文でした。ResNetなどを代表として数多くの成功を目にし、我々が当然必要だと思い込んでいた batch normalization layers ですが、行き着くところまで行ってしまった感のある状況で、その先を目指した時、いろいろと問題となることが顕在化している、と。1つは学習過程と推論過程で構造が全く別のものになっていること。もう1つは小さいとはいえ学習パラメータを含んだ層であり計算コストが掛かっていること。このような背景から batch normalization layers を取り除いたモデルのことを normalizer-free networks (NFNets) と呼んでいます。しかし、そもそも batch normalization layers が導入された理由から分かる通り、この NFNets は学習が不安定になるという問題に再び直面します。この論文は (NFNets というモデルを主張するというよりは) 学習を安定に行うために Adaptive Gradient Clipping (AGC) という処方を導入することがポイントでした。なるほど、だから先に試したようにモデルを変更しただけはでうまく行かないということを逆に確認できた、ということですね。また AGC は学習のコアのステップに導入する必要があるので、今まで使っていた zenkei_ai パッケージの学習ループに修正を入れる必要があります。

よし、全て理解した

3.6 AGC を使ってみる - vballoli/nfnets-pytorch 篇

ということで、まず最初に vballoli/nfnets-pytorch で AGC を使ってみることにします。ドキュメントを見ると（きちんと書いてありました）optimizer に wrapper をかぶせる形で対応しているようです。

```
In [19]: #from sklearn.utils import np
# from sklearn import metrics
# from sklearn import cross_validation
# import copy

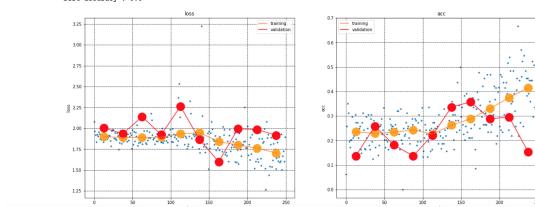
def f1():
    model = SVC()
    model.fit(X_train, y_train)
    self.loss_dict = {}
    self.loss_weights = {}
    self.best_metric,
    opt_func,
    vtr = None
    val_tse = None
    epoch = 0
    lr=1.0e-3
    step_size=1000
    best_metric_type='acc',
    Verbose=0;
    vtr = None
    opt_func = None

    optimizer = opt_func(model.parameters(), lr)
    if opti:
        optimizer = SGD(model.parameters(), lr=lr, momentum=0.9, nesterov=True)
    else:
        optimizer = Adam(model.parameters(), lr=lr, betas=(0.9, 0.999), epsilon=1e-08, amsgrad=False)
    ignore_apm = [fc[1] for fc in model.named_children() if 'apm' in fc[0]]
    grad_ace = 1

    b_val = True if not val_tse is None else False
    if not best_metric_type in ['loss', 'acc']:
        raise ValueError('best_metric_type must be either "loss" or "acc"')
    else:
        self.loss_type = best_metric_type
```

早速 AGC を使って学習してみましたが、やっぱりうまくいってないようで、10 エポックで validation accuracy が 35.8% ほど。

```
In [26]: xm.save_history(
    history=timp[20120323-goro-jima-dataset7-09b-nfnats_vhallow1-resnet18-h01",
    weights=weights,
    best_weights=None,
    weights_path=timp[20120323-goro-jima-dataset7-09b-nfnats_vhallow1-resnet18-h01_dens.pt,
    best_weights_path=timp[20120223-goro-jima-dataset7-09b-nfnats_vhallow1-resnet18-h01_best_weights.pt,
    weights=timp[20120223-goro-jima-dataset7-09b-nfnats_vhallow1-resnet18-h01_best_weights.pt]
```



まだ何か根本的に理解できてないところがあるのでしょうか？

3.7 AGC を使ってみる - timm 篇

試行錯誤するときに、2つのオプションを持っていると言うのはいいことですね。ということで、今手元にある実験台のもう一方のtimmを今度は試してみます。こちらは勾配を計算

```
loss.backward()
```

をした後で、パラメータの更新

```
optimizer.step()
```

をする前のところで、勾配を修正する関数adaptive_clip_grad()を呼ぶという使い方をするようです。

```
with torch.set_grad_enabled(True):
    outputs = model(inputs)
    loss_fn(outputs, labels)
    raw_loss = loss.item()

    # backward -- accumulating the gradients
    loss.backward()

    n1_trn += inputs.size()[0]
    #err_trn_metric['loss'] += raw_loss * acc1
    trn_metric['loss'] += raw_loss / grad_acc
    avl_trn_metric[1] += raw_loss / grad_acc

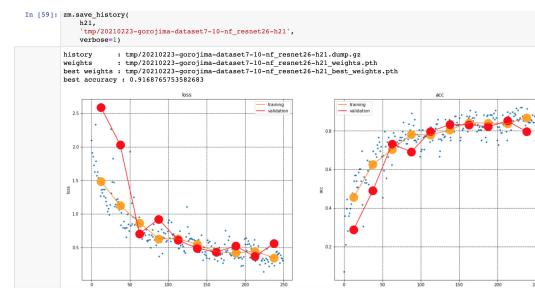
    for m in range(len(avl_trn_metric)):
        if m == 0:
            metric = m_fn(outputs, labels)
            trn_metric[m].append(metric)
            avl_trn_metric[0] += metric / grad_acc
        else:
            metric = m_fn(outputs, labels)
            trn_metric[m].append(metric)
            avl_trn_metric[0] += metric / grad_acc

    # ACC
    if acc:
        adaptive_clip_grad(
            model.parameters(),
            clip_factor=0.01,
            eps=1e-05,
            norm_type=2.0)

# update the parameters
optimizer.step()
# zero the parameter gradients
optimizer.zero_grad()
```

先と同様にAGCを使って10エポックほど学習したところ、こちらはvalidation accuracyが84.6%まで上がりました。

しかし同じ学習ループを使ってAGCを使わないで10エポック学習させた結果の方が85.1%と僅かですがよくなりました。



それに前に言ったとおり、このデータセットは単純なResNet18で94%を超えるので、やはり期待していたSOTAの性能が出ているとは言えません。関数adaptive_clip_grad()はいくつかのパラメータを持っていて、今はデフォルト値を使っていますが、きちんとこれらのhyper parameter tuningしないと性能は出ないのかなと思います（当たり前のことですね）。

3.8 世間の情報を探してみる

今回の調査はZAFの自分の発表用に、深く掘り下げないでササッと調べて「簡単に使った、そして動いた」というデモをしたいという浅はかな考えで進めてきました。その結果ここまで紹介したように、そんな簡単な話ではないということを身を以て味わったということです。さて、世の中の人たちもみんなこんなに苦労しているのかどうか、最後にちょっとググってみました。出てきたページの1つ『TadaoYamaokaの日記』というブログサイトの2021年2月20日のエントリー『将棋AIの実験ノート：Normalizer-Free Networks』(<https://tadaoyamaoka.hatenablog.com/>)

4.2 妄想と共感

には

- ウェブ化（オンライン・フォーラムだけ）
- 書籍化（メンバーの個人プロジェクトはスタート）

が挙げられます（他にも沢山あると思います）。

4.2 妄想と共感

そんな気持ちを持ちながら、ZAFの活動については、その時に、あれこれ考えて、常に形を変えたり大きく広がったりしていると思います。そういう流れの中の最近の「ふわっ」としたイメージをまとめられる範囲でまとめるとして、以下のような言葉になります：

- ZAFは（地域）コミュニティを目指している。
- コミュニティとは「主体的な人」の集まりであり、それはつまり「秘密結社」だ（瀧本哲史）
- （秘密）結社は同人であり、同人といえば同人誌である
- 人は、たのしそうなイベントに集まる
- 思考やアイデアは、おもしろそうな雑誌のまわりに集まる
- 「たのしそうなイベント」がZAFである
- 「おもしろそうな雑誌」がZAMである！

なんか、いい感じに発展してきた気がします。そんなことを感じながら日々あれこれ考えています。そんな中、最近、共感したツイートがありましたので、ここで2つほど紹介したいと思います。

4.2.1 静かな活動

1つ目は“Jazz The New Chapter”という（わたしたちのような同人誌ではなく、きちんとした）商業雑誌を運営している柳樂光隆さん(Elis_ragiNa)のツイート(https://twitter.com/Elis_ragiNa/status/1361522687621828608)です。

個人的には「自分で枠を買ってやる」ってのと、「タイムリーじゃないことをやれる場所を作る」ってのが面白いと思って、現状、そういう場所が少ないと部分での提案でもある。

プロモーションや広告、バズから離れるための試み。パーソナルな音楽との付き合いをシェアできる場所というか、ね。

とはいって、TUNEINは世界中で使われてるアプリだから、実はかなりの聴取者がいて、かなり驚く。

radikoだと日本の番組しか聞けないから、海外の人が偶然聞くみたいなことはなかなか起きない。

リアルタイムのみで不便なアプリだが、想像してたよりかなり可能性を感じて、好きになってる。

”

これは地方FMステーションの時間枠を自分で買って、自分の好きな音楽を流そう、という話（なのかな？）。仕組み的には企業がやっていることを「私」がやるということですが、「プロモーションや広告、バズから離れるための試み」とあるように目的は明らかに違いますよね。

本来個人的なものであるはずのSNS（という考え方自体が、あまりにもnaiveなんですよ

2021年2月24日

18

Zoomライブ

月刊ZAM創刊！ほか

ZENKEI AI フォーラム

第4章

『月刊 ZENKEI AI MAGAZINE』創刊

ZENKEI AI FORUM (ZAF) 2021年1月で『技術書典10』を振り返る中でいきなり雑誌創刊を宣言し、毎月のイベント時に、前月の内容を書籍化した月刊紙を（オンラインで）発行することにしました。この1月のZAFの内容を、当日発表した（わたしを含む）3人がその後1ヶ月をかけて書き上げ、ZAF 2021年2月のイベントにおいてこの記念すべき ZENKEI AI MAGAZINE (ZAM) の創刊第1号を発刊しました。ここでは ZAM 創刊に至る流れと、創刊号の共同執筆の内容を、まとめたいと思います。

4.1 前兆

長いもので、ZAFの前身の ZENKEI AI SEMINAR がスタートしたのが 2017 年なので、この AI 技術の地域コミュニティ活動も既に 3 年を超えることになります。わたし自身、要領が良くなかったり、手が早くなくスピード感に劣るということもあるので、やると決めたことはきちんとやり切りたいし、やりっぱなしにしたくないと思ってます。当たり前のことですが、人生は有限なので、瞬間々々意味のあることをやりたいし、意味のあることはきちんと形にしておきたい。そういう意味の「責任感」を持って、少なくとも自分の手の届く範囲のことからはやっていきたいなと思っています。

そういう偉そうなことを言わなくとも、単に、ふと自分はどれくらい頑張ったかなと振り返ってみたとき、やってきたことがきちんと形になってたらいいなと時々思います。

実際にこれまでも ZAF のコンテンツ化、アーカイブ化は意識的に行ってきました。具体的には

- YouTube のアーカイブ
- スライド、資料などのアーカイブ
- コンテンツのポッドキャスト化 - ZENKEI AI Podcast (ZAP)

などは既に行っています。（ZAP は、気付くと 2020 年 8 月の途中で止まってますね。）一方、今のところできてないこと、やってないこと

3.8 世間の情報を探してみる

entry/2021/02/20/160626) に、同じように NFNets を使おうとしている記事がありました。コードは PyTorch で timm をベースに独自に書かれたものようですが、ResNet と比較して良い結果は得られなかったようです。（そして、これをみて少し安心しました。）

一方で、今回の発端となった phalanx さんですが、その後フォローアップのツ

イート (<https://twitter.com/ZFPhalanx/status/1364163567226773504>) をつぶやかれてます。

『ローマは一日にして成らず。』今度きちんと論文を読み直して、是非この画像分類 SOTA なモデル+学習方法をマスターしたいと思います。（やっぱりパラメータ・チューニングかなあ……）

